

「劣化言説の時代」の メディアと論客： 言論と論客の「再帰性」をめぐって

平成日本若者論史 Special

後藤和智
(後藤和智事務所 OffLine)

第10回「河上肇賞」投稿論文

「劣化言説の時代」の

メディアと論客：

言論と論客の「再帰性」をめぐって

平成日本若者論史 Special

後藤和智

(後藤和智事務所 OffLine)

目次

まえがき	6
同人誌版まえがき	6
はじめに	7
第1部 劣化言説とメディアの歴史	9
第1章 劣化言説とはなにか	9
1・1 はじめに	9
1・2 現代日本人の「劣化」認識とメディア	10
1・3 「バカを相手に商売している」	13
論客の出現	13
1・4 なぜ「若者の劣化」言説が 求められるのか——原因と理由	14
第2章 「若者の劣化」言説の原因と理由	17
2・1 はじめに	17
2・2 原因・戦後消費文化とアイデンティティ論の形成 ——「豊かな社会」の中での 「不安な自己」という幻想	19
第2部 劣化言説と若者論の変容	28
第3章 「新型うつ病」のポリテクス	28
3・1 はじめに	28
3・2 非定型うつ病への無理解 ——日本のうつ病論からのアプローチ	30
3・2・1 「新型」うつ病と「新型でない」うつ病	30
3・2・2 非定型うつ病とは何か	31
3・2・3 日本のうつ病論に対する疑念	32
3・3 「若者論派」精神分析の陥穽 ——香山リカの変遷から	33
3・3・1 「30代うつ」から始まった	33
3・3・2 前史——「解離」論以前の香山リカとその周辺	35
3・3・3 「インターネット・マザー」	36
3・3・4 「就職がこわい」	38
3・3・5 「なぜ日本人は劣化したか」	39
3・3・6 まとめ	41
3・4 まとめ	41

——「新型うつ病」のポリティクス……………	41
第4章 「ヤンキー」論と	
広告文化・消費社会論の	
位相 ……………	44
4・1 はじめに……………	44
4・2 「ヤンキー」論の布置……………	47
4・2・1 はじめに……………	47
4・2・2 現在の「ヤンキー」論への批判……………	50
4・2・3 現在の「ヤンキー」論の形成と差別の再生産……………	53
4・2・4 内向きの論理……………	55
4・3 おわりに……………	59
——「批評」の病理をどう見るか……………	59
第5章 「若者の右傾化」論はいかにして展開されたか	
61	
5・1 はじめに……………	61
5・2 問題意識……………	62
5・3 2005年衆院選の「若者論」……………	65
5・4 「若者の右傾化」論を受け入れる……………	67
「ロスジェネ」論客……………	67
5・5 「若者の右傾化」論の形成と……………	69
〈若者〉敵視のポリティクス……………	69
5・6 おわりに……………	69

——近年の「若者の右傾化」論への批判を交えて71	
第6章 対抗アイデンティティの罫——「新しい働き	
方」は若者を幸せにするか ……………	75
6・1 はじめに……………	75
6・2 「降りる生き方」の罫……………	75
——「新しい時代の正義」の……………	75
何が危ういのか……………	75
6・2・1 現代の「降りる」生き方の流れ……………	75
6・2・2 現代の若者論との関係性……………	77
6・2・3 グローバル化と「降りる」生き方の間で……………	79
6・3 若者の「新しい幸せ」の虚妄……………	80
——古市憲寿試論……………	80
6・3・1 はじめに……………	80
6・3・2 「豊かさの中の欠乏」から「欠乏の中の豊かさ」、……………	81
あるいは「リアル」から「ニヒル」……………	81
6・3・3 現代の若者論の「完成形」としての古市憲寿……………	81
6・4 まとめ——中間の喪失……………	83
第7章 まとめ・現代世代論の転換	
——「豊かさの中の欠乏」から……………	86
「欠乏の中の豊かさ」へ……………	86
7・1 はじめに……………	86
7・2 現代若者論の形成……………	87

7・3 「豊かさの中の欠乏」から

「欠乏の中の豊かさ」へ……………89

第3部 劣化言説の計量分析

——計量テキスト分析による

統計的アプローチ

93

第8章 問題意識と手法……………93

8・1 はじめに……………93

8・2 計量テキスト分析によるアプローチの概要……………94

8・3 分析の概要……………100

8・4 なぜ香山リカなのか……………103

8・5 分析手法・環境……………108

第9章 分析1——単語を中心とした分析……………113

9・1 はじめに……………113

9・2 対応分析による書籍と単語の分類……………113

9・3 内容の違いの影響に……………116

関する分析と考察……………116

9・4 階層的クラスター分析による分類と……………123

クラスターごとの単語の分析……………125

9・5 時期による違いの分析……………125

第10章 分析2

——コーディングを中心とした分析……………131

10・1 はじめに……………131

10・2 使用するコードとその布置……………131

10・2・1 基礎……………131

10・2・2 推測・推論……………132

10・2・3 経験・伝聞・述懐……………133

10・2・4 比較……………133

10・2・5 比較若者……………133

10・2・6 精神分析・精神医療……………133

10・2・7 時代・思想……………134

10・2・8 政治……………134

10・2・9 経済……………134

10・2・10 その他青少年……………134

10・2・11 その他……………135

10・2・12 人物……………135

10・3 コードに関する分析(単純集計/Jaccard係数)……………136

10・3・1 「若者」「学生」……………136

10・3・2 「かつて」「増える/急増」……………138

10・3・3 「彼ら」「私たち」……………140

10・3・4 「かもしれない」「(し)つつある」「だとしたら/すれ……………140

ば」……………140

10・3・5 「伝聞」「事例」「自分の思い出」……………142

10・3・6 「自己愛」「精神分析(人物)」「新宮一成」……………144

10・3・7 「新宮一成」以外の人物(表10・9・章のJaccard……………144

d 係数のみ) 145

10・4 コード間の関連に関する分析
(対応分析) 145

10・4・1 書籍単位での分析 147

10・4・2 内容カテゴリ・クラスターごとの分析 150

10・4・3 刊行時期ごとの分析 152

10・5 まとめ——〈香山リカ〉は
あなたと一緒に泣いている? 153

第4部 結論

第1章 まとめ

——「劣化言説の時代」における

若者論とメディアの変容 158

11・1 はじめに——ヘイトスピーチと劣化言説の関係性 158

11・2 再帰的言論

——デフレ化するメディアと、

アイデンティティをめぐる「闘争」 160

11・3 再帰的／多元的論客——メディアが求める社会像を反

復する「論客」 162

11・4 おわりに 164

おまけ 167

まえがき

同人誌版まえがき

47冊目の同人誌となります、後藤和智です。本書は、2014年の「上筆賞」（藤原書店）に投稿し、最終選考まで残ったものの、残念ながら落選した論文「劣化言説の時代」のメディアと論客——言論と論客の「再帰性」をめぐって」の同人誌化です。最終選考の内容は、『環』（藤原書店）第60号に掲載されています。

最終選考まで残ったことで、第一線で活躍する論客、研究者の私の論文に対する感想や意見を見ることができました。しかし残念ながら、私の論文、というよりは若者論を学術的、科学的な研究対象とすることの意義についてはほとんど理解されなまま、ただ「青年の主張」（とはいえ私も2015年5月現在で30歳なんですけどね……）として捉えられてしまったことに、著しく絶望感を覚えてしまいました。恐らくこのあたりの危機感を共有してくださったのは、選考委員の中でも田中秀臣氏だけではないかと思えます（それ故、ブログでも私の論文への支持を表明してくださった田中氏には深く感謝しております）。

現代の若者論は、表面的にはほとんどエンターテインメントとして流通しているように見えます。そして若者論は、若い世代の「異

常さ」「おかしさ」について、お茶の間や職場、ネットなどで「消費」されるだけのものと見なされているように思えます。しかし、絶対量だけは多く、自己啓発書やビジネス書にも若い世代の「劣化」を嘆く言説は幅広く見られます。そしてそれらが、若い世代に対する視点を歪めているというのが私の視座です。

若者論や、あるいは若い世代、そして現代社会が「劣化」しているという言説を学術的に捉えることの意義については、特に社会学・教育社会学の場においても支持されているように思え、本書でも採り上げた是永論氏や、あるいは牧野智和氏など、実際に研究を行っている人も少なくありません。しかし、残念ながら一般的なメディア、社会評論の場には浸透していないということを突きつけられました。だからこそ、本書のまとめではヘイトスピーチとの関連性も絡めて論じたのですが……。

2014年の「第10回東方紅樓夢」で出した同人誌『天狗組のメディアの世界を覗く旅——市民のためのメディア・コミュニケーション論の基礎』では、「メディアと若者論」にも触れ、メディア論の視点で若者論を論ずることの意義を考察しました。また2015年に出した商業新刊『あいつらは自分たちとは違う』という病——不毛な「世代論」からの脱却』（日本図書センター、2013年）では、若者論が社会との関わりの下で歴史的に形成されるものと捉え、歴史

的な分析を行いました。

本書でも示した通り、若者論の研究は、ヘイトスピーチなど、現代の日本の社会に関する言説を捉える上で多くの示唆を与えてくれます。だからこそ私は常に新たな分析手法（テキストマイニングなど）を導入し、若者論を分析する意義を訴えているつもりです。そのことを理解してくれたら、嬉しいことの上ありません。

おこめ

本書は、現代社会が「劣化」しているという言説に着目し、その構造を解き明かすための論文である。そして本論では、その解明のために、社会学理論と質的研究と統計学の融合を図るものである。

1990年代、バブル崩壊以降の社会不安の高まりにより、現代社会のあり方を問う論説が多く生み出されるようになった。そしてそのような機運の高まりの表出の一つとして、1990年代終わり頃より盛り上がるようになった現代の子供・若者へのバッシング的な言説である。元々「今時の若者」に関する年長世代の「愚痴」と言われるような言説はあったが、1990年代終盤以降は、怪しげなニセ科学理論に基づく若年層への差別的な「理解」が頻出したり、若年層の「劣化」が政策課題になって「奉仕活動の義務づけ」「バーチャル・リアリティは悪であるとはっきり言う」(2000年・当時の森善朗政権下での教育改革国民会議「子どもへの方策」<http://www.kantei.go.jp/kyouiku/1bunkakai/dai4/14siryou.html>)などの「提言」が見られるようになった。また多くの論客が若者論に「参戦」

し、独自の理論を述べてきているが、それらは互いに検証されることはほとんどない。

近年になって、近隣諸国や在日外国人への憎悪を煽る言説や、あるいは若い世代による上の世代をバッシングする言説も見られている。これらの言説は、1990年代以降に流行した劣化言説の延長上にあり、「他者」に対する一方的な決めつけや過剰なバッシング、仲間内の情報や理論の相互参照だけで過激化していく理論、などといった構造を共有している。それらを読み解くため、改めて若者論の構造を解き明かしていくことが必要となる。

本論は、近年の社会科学の理論と、筆者がこれまでライフワークとして行ってきた若者論の収集及び分析、そして統計学を用いて、若者論の姿を明らかにしていく試みである。

本論の構成について説明する。第1部では本論の分析の枠組みとなる社会学理論について解説する。社会科学の理論は、近年になって計量研究が一般書のレベルでも見直されつつあり、東京大学のSSZ調査など長期的な社会調査から現代社会の姿について明らかにしていく研究も見られるようになってきている。そこで提示されている現代の日本社会のあり方と、なぜ若者論が受け入れられるのかという点について、メディア論の知見も交えつつ考察し、本論の理論的基盤を提示する。

第2部では、主に筆者が刊行してきた同人誌から、近年の若者論の状況を質的に分析した論考を再構成して掲載し、それらの若者論が若い世代へのイメージと共にとどのような社会像を提供しているかについて検討を行う。取り扱うトピックは「新型うつ病」「マイル

ド)ヤンキー」「若者の右傾化」、そして若い世代による「反成長」「反競争」系の言説である。これらの言説は、所謂「ロストジェネレーション」の言論市場からの退潮によって新しい枠組みの若者バッシング、ないし若者擁護論として流通しているものであるが、その構造的問題を明らかにしていく。

第3部では、若者論で活躍する論客に着目し、その論客が刊行してきた著作について形態素解析を行い、さらにそのデータを分析する(計量テキスト分析)ことにより、代表的な若者論の構造について解き明かすものである。近年では無料または安価で入手できる統計解析ソフト、テキストマイニングソフトの発達や、統計学に対する注目の高まりから、評論やジャーナリズムの側にも客観的な評価の枠組みが求められている。第3部では統計学に基づいた評論のあり方の一つのパターンを示すという目的もある。そして第4部では、ここまで得られた知見を基に、現代の若者論についての総合的な評価を行う。

現代の大衆向け社会言説が過激化を辿る一つの理由として、「バカ」を語る分にはなんら問題はなく、反発も織り込み済みであり、そしてそれらは全てパフォーマンクス、ビジネスであって社会に対して悪影響を及ぼすものではない、というある種の慢心があることも考えられる(現にそれを公言する論客もいる)。しかしそのような「慢心」の下であっても、特定の社会集団や世代などを貶める言説がシャワーの如く降りかかった場合、社会全体の認識の枠組みや、「劣化」していると名指しされた社会階層のメンバーのアイデンティティ形成などの影響も考えられる。現にそのような「慢心」で作りに出された言説でも、政策、特に青少年政策に対しては影響を与えている。

「○○が叫ければいい」「間違っていない関係ないし、○○に比べれば自分の罪は浅い」「自分はただ売れる言説を作っているだけで悪いのは大衆のほうだ」——そのような慢心を取り除くことこそ、本論の最終的な目的である。

第1部 劣化言説とメディアの歴史

第1章 劣化言説とはなにか

1-1 はじめに

日本人が「劣化」している、という言説が大手を振って流通して久しい。近年では「いかに日本人が中国・韓国と比べて素晴らしいか」という書籍も多く流通しているが、その多くは旧来の日本人劣化言説と同じ構造を持っている。それは、「劣化」というものが、「自分たち」としての日本人の問題ではなく、主に中高年の読者層が育ってきた「かつての日本」がいかにすばらしく、逆に現代の子供・若者が育ってきた「最近の日本」がいかに異常であるかということを示す述べるものが多い。

他方で、若い世代向けの言説もまた、上の世代を「グローバル社会に適用していない」「新しい価値観を持っていない」「新しいメディアに適応していない」として古い価値観を持つものだと排撃するものが見られる。それらは主に海外で活躍するビジネスパーソンや、ITベンチャーなどで一世を風靡した起業家などによって発信されている。

さらに、それらの言説はより過激化し、近年は「劣化」を言い立

てたい社会集団を「バカ」と呼ぶ書籍も流通している。またネット上の論客においても、自分はいかに「バカ」を知っているか、語れるか、ということを主張するものが出てきている。そしてこれらの言説は、科学や政策の論理というよりも、象徴闘争の論理で動いており、他の社会集団とのつながりや広い社会正義、歴史的観点よりも、いかに自らの主観的な優位性を主張するかということが優先される。

なぜこのような言論は、互いに自らの象徴的な優位性を主張し、そして過激化するのか。その背景には、現代の言論のあり方が、アイデンティティの形成と深く結びついたあり方になっているという現状があるというのが本論の主張である。そしてそのような言論の解体のためには、それぞれの言論の間違いを指摘することと並行して、なぜ過激化するのかということ現代の言論の流れの上で確認し、検証する必要がある。

本論では、平成年代の若者論を、そのような象徴闘争的な言論の一つの例として採り上げ、その歴史的な流れと構造について読み解いていくものである。そのため、本論の目的は、そのような若者論の誤りを検証するというものではなく、現代社会や特定の社会集団・階層などが「劣化」しているとする言説の一つの典型として、若者論を「解体」していくという試みである。

表1-1 現代日本人の「劣化」認識(N=1,046)/浅岡[2011]p.34をもとに作成

		Q4 日本人や日本社会が劣化・質が低下しているという見方						合計
		そう思う	まあそう思う	あまり そう思わない	そう思わない	わからない		
年代	29歳以下	31.2%	54.1%	12.4%	0.6%	1.8%	100.0%	
	30～39歳	26.6%	58.3%	9.0%	1.0%	5.0%	100.0%	
	40～49歳	31.0%	55.0%	8.8%	2.9%	2.3%	100.0%	
	50～59歳	41.2%	52.5%	5.4%	1.0%		100.0%	
	60～69歳	46.2%	44.5%	6.4%	1.7%	1.2%	100.0%	
	70歳以上	43.4%	46.5%	3.9%	4.7%	1.6%	100.0%	
合計		36.2%	52.5%	7.7%	1.8%	2.0%	100.0%	

表1-2 年代別に見た劣化比較時期・劣化が始まった時期(浅岡[2011]p.36をもとに作成)

年齢	劣化比較時期		昭和～戦時下 (1925～1945)		終戦～高度 経済成長期 (1945～ 1960年代)	低成長期・ バブル経済 (1970～ 1980年代)	バブル経済 崩壊と 平成時代 (1990年代)	2000～2005年	2006～2010年	わからない	N
	明治時代以前	明治～大正									
29歳以下	14 9.7%	15 10.3%	15 11.0%	45 31.0%	43 29.7%	51 35.2%	27 18.6%	11 7.6%	21 14.5%		145
30～39歳	32 18.9%	29 17.2%	25 14.8%	60 35.5%	62 36.7%	39 23.1%	20 11.8%	12 7.1%	16 9.5%		169
40～49歳	12 8.2%	12 8.2%	9 5.8%	44 29.9%	61 41.5%	41 27.9%	10 6.8%	6 4.1%	14 9.5%		147
50～59歳	28 14.7%	43 22.5%	37 19.4%	94 49.2%	62 32.5%	44 23.0%	16 8.4%	8 4.2%	6 3.1%		191
60～69歳	14 8.9%	22 14.0%	26 16.6%	64 40.8%	58 36.9%	41 26.1%	17 10.8%	9 5.7%	9 5.7%		157
合計	100 12.4%	121 15.0%	118 14.6%	307 37.9%	286 35.4%	216 26.7%	90 11.1%	46 5.7%	68 8.2%		809

年齢	Q6 いつごろから始まったと思うか		昭和～戦時下 (1925～1945)		終戦～高度 経済成長期 (1945～ 1960年代)	低成長期・ バブル経済 (1970～ 1980年代)	バブル経済 崩壊と 平成時代 (1990年代)	2000～2005年	2006～2010年	わからない	N
	明治時代以前	明治～大正									
29歳以下	1 0.7%	1 0.7%	4 2.8%	8 5.5%	22 15.2%	49 33.8%	30 20.7%	10 6.9%	20 13.8%		145
30～39歳	4 2.4%	3 1.8%	2 1.2%	18 10.7%	26 15.4%	18 45.0%	18 10.7%	8 4.7%	14 8.3%		169
40～49歳	1 0.7%	1 0.7%	1 0.7%	10 6.8%	36 24.5%	64 43.5%	15 10.2%	4 2.7%	15 10.2%		147
50～59歳	10 5.5%	11 5.8%	1 0.5%	25 13.1%	45 23.6%	64 44.0%	20 10.5%	3 4.7%	6 2.6%		191
60～69歳	1 0.6%	0 0.0%	4 2.5%	16 10.2%	41 26.1%	65 41.4%	17 10.8%	6 3.8%	7 4.5%		157
70歳以上	0 0.0%	0 0.0%	2 1.7%	25 21.6%	35 31.0%	37 31.9%	8 5.2%	3 2.6%	7 6.0%		116
合計	8 1.0%	6 0.7%	14 1.7%	102 12.6%	206 25.5%	375 46.4%	106 13.1%	40 4.9%	68 8.4%		925

1・2 現代日本人の「劣化」認識とメディア

本論に入る前に、まず我が国における社会の「劣化」認識について見ていきたい。日本人の現代社会に対する「劣化」という認識については、是永論らの『日本社会「劣化」の言説分析——言説の布置・展開及びその特徴と背景に関する研究（2008年度～2010年度 科学研究費助成金 基礎研究（B）研究成果報告書）』（READ研究科、2011年）の中で行われたアンケート調査に詳しい（注1・1）。

まず、全体として、「日本人や日本社会が劣化・質が低下しているという見方」に対しては、全体で「そう思う」「まあそう思う」を併せて88・4%という極めて高い水準である（表1・1）。特に50、60代については「劣化」について首肯する割合が90%を越え、逆に40代よりは80%台前半～半ばとなっており、50代を境として年代によって差があることもまた浮き彫りにされている。ただし、最も低い20代でも「そう思う」「まあそう思う」は合わせて85・3%と高い水準ではあるが、40代以下では「まあそう思う」が「そう思う」に比べて20～30ポイント程度高いのに対し、50代ではその差が10ポイント程度、60代以上ではほぼ同率であり、「ここにも「劣化」認識に対する世代差が窺える。また「いつの時代と比較して劣化したのか」「劣化が始

「劣化言説の時代」のメディアと論客——言論と論客の「再帰性」をめぐって

表5-2 年代別に見た劣化している分野(複数回答、速回[2011]p.39をもとに作成)

	政治	経済・産業	労働・勤労	医療・介護・福祉	教育・しつけ	芸術・文化	スポーツ	メディア・ジャーナリズム	モラル・道徳	暮らし	N
29歳以下	98	81	76	41	113	13	12	42	110	38	145
	67.6%	55.9%	52.4%	28.3%	77.9%	9.0%	8.3%	29.0%	75.9%	26.2%	169
30～39歳	110	99	90	41	144	23	8	49	145	57	169
	65.1%	56.2%	53.3%	24.3%	85.2%	13.6%	4.7%	29.0%	85.8%	33.7%	147
40～49歳	93	80	78	39	126	11	12	38	120	46	147
	63.3%	54.4%	53.1%	26.5%	85.7%	7.5%	8.2%	25.9%	81.6%	31.3%	191
50～59歳	129	99	96	43	166	14	14	57	171	56	191
	67.5%	49.7%	50.3%	22.2%	86.9%	7.3%	7.3%	29.8%	89.5%	29.3%	157
60～69歳	120	80	81	54	138	14	11	58	121	41	157
	76.4%	51.0%	51.6%	34.4%	87.9%	8.9%	7.0%	36.9%	83.4%	26.1%	116
70歳以上	92	62	61	39	109	12	10	39	96	37	116
	79.3%	53.4%	52.8%	33.6%	94.0%	10.3%	8.6%	33.6%	82.8%	31.9%	925
合計	642	463	462	257	766	67	87	293	773	275	925
	69.4%	53.3%	52.1%	27.8%	86.1%	9.4%	7.2%	30.6%	83.6%	29.7%	

表1-4 年代別に見た劣化認識のきっかけ(複数回答、浅岡[2011]p.37をもとに作成)

年齢	劣化きっかけ		身づてに 噂話を 聞いて	メディアを 通じて 伝えられる 情報から	何となく	その他	わからない	N
	自分自身や 身内・親族の 様子や 実体験から	身の回りの 状況を見 聞きして						
29歳以下	55	85	19	94	9	9	2	145
	37.9%	58.6%	13.1%	64.8%	6.2%	6.2%	1.4%	
30～39歳	71	98	30	101	16	4	1	169
	42.0%	58.0%	17.8%	59.8%	9.5%	2.4%	0.6%	
40～49歳	53	96	21	82	4	3	2	147
	36.1%	65.3%	14.3%	55.8%	2.7%	2.0%	1.4%	
50～59歳	51	131	22	127	6	6	1	191
	26.7%	68.6%	11.5%	66.5%	3.1%	3.1%	0.5%	
60～69歳	48	102	18	110	7	5	1	157
	30.6%	65.0%	11.5%	70.1%	4.5%	3.2%	0.6%	
70歳以上	30	77	14	86	2	5	0	116
	25.9%	66.4%	12.1%	75.9%	1.7%	4.3%	0.0%	
合計	308	589	124	602	44	32	7	925
	33.3%	63.7%	13.4%	65.1%	4.8%	3.5%	0.8%	

まったのはいつか」という内容の設問に対しては、前者は第二次世界大戦の終戦（1945年）からバブル期にかけて、後者はバブル期から1990年代にかけて、というものが主流である（表1-2）。特に50代以上においては、「いつの時代と比較して」劣化しているのかについては、「終戦〜高度経済成長期」が際立って高くなっている。他方で20代においては、「いつの時代と比較しているのか」「いつからか」という設問に対しては「わからない」という回答が他の世代と比べて際立って多く、現代社会が「劣化」しているという認識は持ちつつも、具体的な時期については不明であり、むしろ「劣化」という認識が最初からある状態で、上の世代の「劣化」認識を受け入れてきたという側面もあるだろう。そもそも2010年の20代というのは1990年代以降の若者論において「問題のある」世代とバッシングされてきた世代の中心でもある。

劣化が認識されている分野については、「教育・しつけ」「モラル・道徳」が、3位の「政治」を15ポイント程度突き放して高くなっており（表1-3）、青少年分野における「劣化」認識はかなり強いと言えよう。他方で、「劣化」を認識する経路については、「メディアを通して伝えられる様子」「身の回りの状況を見聞きして」というものが、「自分自身や身内・親族の様子や実体験から」などと比べて顕著に高く、特に中高年層において高くなっているという結果となっている（表1-4）。そのため、「劣化」という認識を考える上では、メディアを通じた「代理体験」について特に検討を行う必要があるだろう。

日本社会が「劣化」しているという言説は、1990年代終わり〜2000年代にかけては、主に若者論の形で流通していた。例え

表1-5 『週刊朝日』連載企画「徹底考察 日本人の劣化」記事タイトル(是永ほか[2011]p.8を参考に作成)

回	号	タイトル	執筆者
第1回	8月31日	こは「無意識にアメリカ人になりたがる危険」	井上ひさし
第2回	9月7日	家族「親」を演じる僕らを「三七物」と子が見抜く	重松清
第3回	9月14日	脳 壊れない機械を使うと、人間が壊れる	養老孟司
第4回	10月12日	官僚 特殊法人は戦前の陸軍。中核が崩壊している	猪瀬直樹
第5回	10月26日	検察・警察 自分たちは正義だと確信し、思い上がり、油断が生まれた	魚住昭
第6回	11月2日	大企業「ダットサン」を日産は捨てた…愚拳でした	片山豊
第7回	11月9日	学力 残念ながら、今の日本に考える世代は存在しません	細野真宏
第8回	11月23日	マナー 個室が街に広がったのです。他人の目は全く気にしない	三浦展
第9回	11月30日	IT社会 一人ひとりが武器を持った。倫理的に荒廃する危険がある	西垣通
第10回	12月7日	男 男らしさを持った女性が増え、優しい男たちはパートナーとなる	香山リカ
第11回	12月28日	サルと比較して… アイちゃんは子育てを勉強した。人間の母親のモデルですね	河合雅雄

ば是永らの研究でも採り上げられていて、2001年に『週刊朝日』が連載として掲載した「徹底考察 日本人の劣化」(表1・5)は、その多くが子育て・青少年絡みであった。また、同時期には、現代の青少年の「異常さ」から、日本人・現代人の「劣化」について語る書籍が、主に新書にて刊行されている。ベストセラーとなった、正高信男の『ケータイを持ったサル——人間らしさの崩壊』(中公新書、2003年)は、携帯電話に代表されるような現代の若年層のコミュニケーションのあり方を、霊長類研究の立場から「サル」的なものであるとして話題を呼んだ(注1・2)。また丸橋賢は「退化する若者たち——歯が予言する日本人の崩壊」(PHP新書、2006年)では、若い世代におけるかみ合わせの「退化」が若い世代、ひいては日本人の「退化」を引き起こしている」と主張しているものだが、これも労働問題などに関する事実誤認が多いのと同時に、若い世代を批判することによって自らの「全人歯科」なるも

のを普及させるといふ意味合いもあると見られる(注1・3)。また、先に引いた是永論らの研究においてアンケート調査の分析を担当した浅岡隆裕は、2000年代半ば頃から始まる、映画「ALWAYS S 三丁目の夕日」の公開を契機とする「昭和30年代ブーム」も、この劣化言説の広がりの一つの結実として捉えている(注1・4)。浅岡は劣化言説に対して世代論という見方もできるとして、次のように述べている。

年代ごとに集計を行ったが、(世代を超えて共通している)ところ、(世代間ギャップとなっている)ところが明確に分かれていた。回答では年代別にみた差異を中心に述べてきたわけだが、それは大きな構造で言えば、世代論としても考えることができ、実際に当事者や若者の逸脱的だと見なされるような行為が目につきやすく、そこに批判的な目が生きがちなのは容易に想像されよう。これらの行動は、上の世代から、過去の自分たちや「そこであるはずだ」といった理念型と比較対照される。こうした見方が、当事者もしくは若者の自己否定という影響となって現れる。自己否定が当事者の行動や態度自体を束縛し、その結果、その(他者からの)規定通りに行動してしまい、さらに批判の対象となる…という悪循環を垣間見せる形となった。(注1・5)

1・3 「バカを相手に商売している」 論客の出現

また、現代の論客において、マーケティング的な視点から意図的に煽っているのだ、と主張するものも現れている。例えば2005年のベストセラーとなった『下流社会——新たな社会集団の出現』（光文社新書、2005年）の著者・三浦展は、本章第2節で挙げた是永論らの研究における岡田章子による論文の中で、新書で展開される自分の言説について、次のように自己分析をしている。

三浦氏本人は、調査分析の客観的な著述を書きたいがそれは売れない、ことに若者論に関してはパッシングのほうが絶対に売れるのだという。現に『マイホームレス』（筆者注：三浦展『マイホームレス・チャイルド』（クラブハウス、2001年／文春文庫、2006年）。ただしサブタイトルは、原書では「今どきの若者を理解するための23の視点」だったのが、『下流社会』のベストセラー化を受けて、文庫版では「下流社会の若者たち」に変更されている）は『下流社会』ほど爆発的には売れなかった。さらに、現状を客観的に描写し、例えば「現代の若者はゆるい生き方をしたいと思っている」のように書く、若者（当事者）も批判者も、その事実判断を、その事実に対する肯定的な価値判断だと誤解する。すなわち、前者はそれでいいんだ、と安心してしまうし、後者はそれでいいと思っているのか、と反発するという。売れない上に、そのような誤解を招くのは面白くない、マーケティング・アナリストと名乗っている

るからには、自分の本もこうすれば売れるよ、と見せておきたい、というのもある。そこで、「そんなゆるい生き方をしていると下流に落ちるぞ」という価値判断をすると、本は売れる。

だから『下流社会』は意図的にパッシング気味に書いたという。

（注1・6）

三浦はマーケティングを出自としており、それ故三浦の言説もまたマーケティング的な視点を重視したものとなっている。『下流社会』について採り上げた2005年12月22日付東京新聞の「こちら特報部」欄で三浦は、『学問は予測してはいけない。でも、マーケティングは予測しなきゃいけない。社会が向かう方向を示すとき、学問は位置まで正確でないといけないが、マーケティングは、大体でいい。素早い意思決定のためにやっているんだから。『下流』も、厳密な定義はなく、簡単に言えば「キーワード」。この言葉は、モヤモヤした世の中が、すっきり見える眼鏡であり、社会を考えるための武器』（注1・7）と述べており、若い世代を叩くことにより一定の「あるべき」価値判断を示すことによって売っているのだ、という視点を明確にしている。

現にこの東京新聞の記事の書き手が、三浦の言説に《何百億も稼ぐIT長者がいる一方で、フリーターやニートが増えているのを見れば、「一億総中流」が崩壊していることに誰もが気付いているだろう。『下流』の若者は、それを悪いことだとは思わず、中流へのこだわりもない。親の建てた家があり、「ユニクロ」や百円ショップで買い物をして、ファストフードを食べれば、定職につかなくても十分生活できる。『なんなんだ』と、上を目指してきた大人は思

いたくもなる。「下流の出現」という三浦氏の指摘は、そんな漠然とした怒りを説明してくれる》(注1・8)と「釣られて」いるのである。

また近年でも中川淳一郎が、自分は《バカを相手にしてちゃんと商売しよう》という立場であること、そして《バカを相手にしたほうが、あんまり知恵使わないで儲かる》(注1・9)と述べている。そして中川は、『ウェブはバカと暇人のもの』や『ネットのバカ』(光文社新書、2009年/新潮新書、2013年)など、ネット上の「バカ」に対する考察を多く発表しているが、「バカ」と中川が見なした人たちに対する、具体的なデータなどが示されるわけではない決めつけも少なくない。しかしこのような態度もまた、先の三浦展に見られるような、社会に対する一つのソリューションとして「バカ」の姿を示してみせる、というものがあるだろう。

三浦や中川などに見られるような、特定の社会集団などを外部化して、そこに「下流」や「バカ」といった好ましくないレッテルを貼り、パッシングを煽るという行為は、少なくともこの2者のスタンスを見る限りでは、それらを叩くことにより読者に対して「正しい」または「あるべき」価値観を提示する、という行為でもあると見られる。そしてそれは、前節で見たような「若者向け」ビジネス書著者にも共通しているだろう。

1・4 なぜ「若者の劣化」言説が求められるのか——原因と理由

ただ、繰り返すが、本論ではそのような言説の具体的な間違いに

ついて述べることは極力避けておきたい。むしろ、これらのパッシング・擁護双方の若者論に共通した構造を見出し、社会的な意義を明らかにして、その上で解体への糸口を見つける、という作業を行うものである。

他方で本章第2節で採り上げた是永らの研究では、メディアの接触量が直接的に「劣化」言説を担保しているというわけではなく、《1)社会問題に興味を持ち、実際に情報収集したことで劣化認識がもたれる、2)劣化認識が強く持たれており、それが社会の状況変化として「悪くなっていく」といった見方を強化しているといったプロセスがあると推察される》(注1・10)とされている。これまで見てきた通り、若者論、そして種々の差別扇動や劣化言説には、他者を叩くことよって自らの「あるべき」価値観、姿のあり方を再帰的に提供するという役割が考えられ、そしてそれらの言説を参照することにより、「劣化」というフィルターを通じて社会問題に興味を持ち、それに見合った情報を参照することによりさらに「劣化」という認識(フィルター)が強化される、という連環を見出すこともできよう。

ただしこのような連環の危うさは、第一にその過程で、個々の認識と、政府の統計調査や研究機関などによる研究とのギャップ、特にマクロ面でのギャップが著しくなってしまうことが挙げられる。そして第二に、誤解を誤解として認識しなくなることにより、「この程度の情報も知らないとは」と「自分とは違う」他者に対する蔑視の度合いを強めてしまう可能性である。

北田暁大は、「関係性の希薄化」論のような通俗的な青少年言説が流通することについて、それに対して「若者の関係性はむしろ緊

密化しているのだ」とする反証主義に一定の理解を与えつつも、それに対して《なぜ先行世代はそれを希薄化として捉えてしまうのか。反証を反復すること（のみ）によっては、こうした問題設定に応えることはできない。いやそれどころか、反証主義は、この問題設定を回避することにおいて、過剰に「メディアの影響」や「年長世代の非合理」を見積もってしまう危険性を孕み持つ。つまり、人びとが非合理なことを信じるのは非合理を垂れ流しているメディアや（影響力を持つ）論者のせいだ、という因果的説明を暗黙のうちに前提としてしまう可能性がある。その因果的説明自体が、データに基づいて検証されるべき仮説であることはいうまでもない》（注1・11）と苦言を呈している。もちろん、本章第3節で検討した通り、若い世代による「上の世代の非合理」をバッシングするようなビジネス書の言説が、自分の世代の価値観を絶対視した非合理なものであるという状況は存在する。

しかし、「なぜ非合理的な若者論が受け入れられてしまうのか」という問題に答えるには、その発信者、すなわち論客側に対する検討も欠かすことはできないだろう。そして、その検討は、誤った若者論を発信している論客が、マクロな事実などと異なった情報「以外」に何を提供しているのか、という観点が重要となる。もちろん「誤った情報を提供しているから誤った認識が生まれる」という単純な問題設定では多くのものが切り捨てられてしまう可能性が高いのは事実ではあるが、誤った若者論を受け入れる側の心理・論理を「理解」しよう、ということとそれらの若者論の誤りという問題もまた切り捨てられてはならない。

実際、若い世代向けの言説を提供している側もまた、上の世代に

対する過剰なバッシングを含んでいることも少なくない。主にツイッター上で、海外で働くビジネスパーソンの立場から日本社会をバッシングして人気を集めている「メイロマ(May|roma)」こと谷本真由美や、2006年に「若者はなぜ3年で辞めるのか?」（光文社新書、2006年）がベストセラーとなってからは「昭和的価値観」をしきりに排撃している城繁幸、そして2000年代半ばにITベンチャーの社長として上の世代を挑発するような言動を繰り返して「勝ち組の若者」の象徴となり、刑事事件で逮捕されてから釈放された後もインターネットやビジネス書などで人気を博している堀江貴文などが典型として挙げられる。

なぜ論客の側が誤った言説を発信し、そして読者層がそのような言説を受け入れてしまうのか、という構造の解明には、論客の側におけるメディア上の振る舞いを構造として示してこそ有用であり、本論はそれを目的としている。そして本論の視点は、若者論のみならず、上の世代や他の社会集団・階層・民族などといったものに対するバッシングを扇動する言説への批判的検討にも最大の助けとなる。少なくともメディア上における論客の役割について一定の構造が明らかになれば、次のようなスタンスには強く見直しを突きつけられるはずだと考えている。

一連の推測がまったく私の見当はずれである可能性も大にある。だが趣味でしている作業なら、的はずれであったとしても、それが益にならないとしても、またさして害になることもあるまいと、執筆した次第である。（注1・12）

- 注 1.1 浅岡隆裕「現代人の劣化認識の実際」、『日本社会「劣化」の言説分析——言説の布置・展開及びその特徴と背景に関する研究（2008年度～2010年度 科学研究費助成金 基礎研究（B）研究成果報告書）』pp.29-71、READ研究会、2011年。なお、同調査はインターネット調査であり、サンプル数は1,046である。
- 注 1.2 ただし、正高の手法については、自分が問題視したい若者の行動を無理矢理「サル」に当てはめる非論理性や、欠陥の多い実験結果の記述など、批判も多い。代表例として、宮崎哲弥『新書365冊』（朝日新書、2006年）、斎藤美奈子『誤読日記』（朝日新聞社、2005年 / 文春文庫、2009年）を挙げておきたい。
- 注 1.3 同書巻末には丸橋の歯科への連絡先があるが、独自の「医療法」を提唱する著作の多くは、自らのクリニックなどの宣伝目的であることが多いという指摘もある。詳しくは、NATROM『「ニセ医学」に騙されないために——危険な反医療論や治療法、健康法から身を守る！』（メタモル出版、2014年）を参照されたい。
- 注 1.4 浅岡隆裕『メディア表象の文化社会学——（昭和）イメージの生成と定着の研究』（ハーベスト社、2012年）第10章
- 注 1.5 浅岡隆裕「現代人の劣化認識の実際」p.70
- 注 1.6 岡田章子「劣化言説と新書ブームの連環」（『日本社会「劣化」の言説分析——言説の布置・展開及びその特徴と背景に関する研究（2008年度～2010年度 科学研究費助成金 基礎研究（B）研究成果報告書）』pp.95-104）p.102
- 注 1.7 2005年12月22日付東京新聞「こちら特報部」
- 注 1.8 2005年12月22日付東京新聞「こちら特報部」
- 注 1.9 いずれも、長澤秀行『メディアの苦悩——28人の証言』（光文社新書、2014年）p.31
- 注 1.10 浅岡、前掲 p.70
- 注 1.11 北田暁大「若者論の理由——若者文化論はなぜ繰り返され続けるのか」（小谷敏ほか編『若者の現在 文化』pp.33-62、日本図書センター、2012年）p.35
- 注 1.12 正高信男『考えないヒト』（中公新書、2005年）p.vii

第2章「若者の劣化」言説の原因と理由

2.1 はじめに

本章では、現代の若者論が置かれたメディア状況と社会的状況について述べていくこととする。

例えば2000年代半ば頃には、若い世代の「格差」「階層化」についての議論が盛り上がった。しかしその議論の多くは、前章で少し採り上げた三浦展の『下流社会——新たな社会集団の出現』（光文社新書、2005年）などのように、若い世代の文化やアイデンティティ、心理の問題であり、経済の問題として取り上げられる機会は少なかった。フリーター問題を指摘した、『仕事のなかの曖昧な不安——揺れる若年の現在』（中央公論新社、2001年／中公文庫、2005年）の著者である玄田有史ですら、「ニート」（NEET・Not in Employment, Educati on and Training）問題を指摘した『ニート——フリーターでもなく失業者でもなく』（曲沼美恵との共著、幻冬舎、2004年／幻冬舎文庫、2006年）では若い世代の心理の問題として捉えるようになっており、若者論における文化やアイデンティティの問題の希求は極めて強いと言える。第5章で述べるとおり、2000年代初頭より見られるようになる「若者の右傾化」論は、このような若年層の「階層化」に対しては、なぜか「階層化」により「下」に追いやられた若年層に対する恐怖を煽る形になって

いるのも、このような若者論のあり方と無関係ではない。

階層化の「発見」により、かえって「下」の階層がバッシングされてしまう経路については、ルース・リスターが「貧困とはなにか——概念・言説・ポリテイクス」（松本伊智朗・監訳、立木勝・訳、明石書店、2011年。原書は2004年）で示した構図が参考になろう。リスターは貧困に関する言説のひとつの作用について、「他者化」という概念を使って解説している。

〈他者化〉はステレオタイプ化やステイグマ付与、さらにはより中立的なカテゴリー化など、関連する多くの社会的プロセスにともない、またそれによって強化される。ステレオタイプ化はフベリングの差別的な形態で、それがあたりまえの性質を示すものとなり、特定の社会集団を同質として描きだす動きをする。これは差違を拡大し歪曲する、形の見えにくい戦略である。（略）対照的に「貧困者」の場合には、ステレオタイプ化は文化的差違をつくり出し、それによって〈他者〉を生み出していく。同時に女性、人種のマイノリティー、障害者など（略）貧困に陥りやすい集団は、それ自体が頻繁に〈他者化〉される集団でもある。

分類とカテゴリー化のプロセスは、政府機関や法制度、メディアや社会科学者によってもたらされるもので、分析すればステレオタイプ化とは違うものだが、ステレオタイプを誘発し、結果として強化することもある。こうしたプロセスは、分類する力を強くもつ（社会）機構によるのと同様に、同市民民によって「貧困者」がどのように扱われるかに影響する。（注2.1）

我が国の若者論について、このリスターの議論を当てはめると、一部の「格差」論者は若い世代の「階層化」や「貧困」については、彼らが「自分たちとは違う」消費社会やメディア接触によって「自分たちとは違う」自己を形成したことにより起こった問題であると、ある論者は若い世代は「自発的に」下層になっているとし、それが今の若い世代の新しい生き方なのだ、とする議論すらある（注2・3）。これらの言説は、若い世代が「自発的に」下層という、新しいライフスタイル¹を実現しているのだ、と擁護している。

2008年に「格差」論争のまとめとして出された『論争 若者論』（文春新書、2008年）の帯には、「虐げられた「蟹工船」世代か甘ったれ「ケータイ」世代か」という文言がある。しかし、仮に若い世代が「甘ったれた」世代だからといって救済がなされるべきではない、というのは決してないはずだ。特定の社会階層を「甘ったれた」存在として、「福祉依存」などを批判するのは、リスターの指摘するイギリスでも起こっていることだし、また我が国においても、若年層のみならず女性（特にシングルマザー）、在日外国人などに対しても起こっている。

ただ我が国の若者論においても一つ特徴的なのは、女性や在日外国人に対するバッシングを批判するような人でさえも、若者論については、むしろバッシングへの批判を批判する立場に変わることもあるということである。例えばある社会学者は、若い世代を叩くような言説を批判することによって、若い世代そのものが抱える問題が覆い隠されてしまう、ということを述べる。

「若者バッシング批判」は若者論批判にエネルギーを注ぎ、若者は劣化していない」ということを言い続けることで、結果として今の若者が抱える様々な問題から目を逸らす働きをしかねないということが指摘できるかもしれない。

「昔と比べて今の若者は劣化していない」ということが事実であったとしても、それは今の若者に何の問題もないということと同義ではない。確かに、このエントリの最初で述べたように、根拠薄弱な若者バッシングに乗った政策が展開されるのは困る。しかし、それとは別の次元で、今の若い人たちが抱える様々な困難を分析し、その緩和を試みることは重要な課題ではないだろうか。様々な若者論を批判し、「若者は劣化してはいない」と言い続けるだけでは、そうした課題に取り組むことはできない。

ほくが若いころには、若者批判を読むだけで嫌な気持ちになつたものだ。なのに、こんなエントリを書くようになったということとは、ほくもそれだけ歳を取ったということなんだろうな。（注2・3）

例えばこの文章における「若者」を「女性」や「在日外国人」などに置き換えて、「女性や在日外国人へのバッシングを批判したところで、彼／彼女らになんら問題がないというわけではない。それどころか、批判者は彼／彼女らの問題を分析するという課題を遠ざけている」というのは間違いなく不当なことであることは言うまでもない。そして女性や在日外国人へのバッシングの批判は、それらの社会集団に対する社会の歪んだ視線が抑圧を生んでいるとしてい

る。そして、繰り返すが、そのような見方は正当である。しかしこれが「若者」となると、なぜか歪んだ視線を投げかけているのは若い世代へのバッシングを批判している側となる。そして社会学者のこのような態度と、本節で採り上げた、若い世代の「階層化」が自主的な選択の結果であるとする言説は表裏一体である。

若者論をめぐるとのようない方にこそ、なぜ若い世代をめぐると議論が不毛なのか、ということを読み解く鍵がある。そしてそのような状況が何によって生み出されてきたのかということをも、理解する必要がある。そしてそれこそが、若者論の「原因」としてのメディア状況、そして若者論が受け入れられる「理由」を形作っている。

2.2 原因・戦後消費文化と アイデンティティ論の形成 ——「豊かな社会」の中の 「不安な自己」という幻想

まずは現代の若者論の「原因」、すなわち現代の若者論が形成されてきた経緯について述べていきたい。これを解く鍵となるのは、主に1970年代以降の消費文化と、その下で活躍した論客のあり方である。

まず1970年代周辺における、若者論をめぐるとの状況について見ていきたい。この時期にベストセラーになった著作として、土居健郎の『甘え』の構造（弘文堂、1971年）、河合隼雄の『母性社会日本の病理』（中公叢書、1976年）、小此木啓吾の『モラトリアム人間の時代』（中央公論社、1978年）といった、精神分

析家や心理学者による「日本人論」であった。そしてこれらは、精神分析の理論、あるいはE・H・エリクソンのアイデンティティ論を底としつつも、多くが独自の社会観、人間観、特に若者観によって構成されていた。その中でも小此木啓吾は、『モラトリアム人間の時代』の文庫版において、自らの精神分析などに基づく「日本人論」により、グローバル化が進行する時代における日本人の自己を主張すべきだ、としている（注2・4）。

この時期の周囲においては、社会病理学的な社会評論が流行した時期でもあるとされている。例えば子育て論においては、広井多鶴子・小玉莞子によると、1960年代の終わり頃に、1960年代半ば頃までは新しい家族のあり方として肯定的に捉えられていた核家族が批判されるようになったとされている。そしてその背景のひとつとして、『現状の様々な家族問題・教育問題への危機感や不安が増すこと』によって、問題が「社会病理」として把握されるようになった（注2・5）ことが挙げられ、その背景には1960年代終わり頃より流行した社会病理学があるとしている。

精神分析や社会病理学などに基づく議論、特に教育論・若者論の枠組みは、1980年代における若い世代向けの消費社会論の隆盛として継承されることになる。小谷敏が言うように（注2・6）、精神分析・社会病理学方面での社会論、特に若者論の展開により、1970年代前半頃まで、青年と社会を連続的に捉えていたものが、既存の大人世代と青年世代の「断絶性」「異質さ」が着目されるようになった。それが特徴的に現れるようになるのが、1980年代の浅田彰らによる「ニューアカ」ブームや、あるいは「プロ教師の会」といった、通俗化された現代思想などによって現代の子供、